

編集後記

忘れもしない、2011年3月11日午後2時46分、日本は大地震（東日本大震災）に見舞われました。この日は北海道医療大学の卒業式の日でした。無事卒業式も終わり、各研究室で実験などをしていたときでした。当別でもたまにはあるやや強めの地震でした。揺れが大きくて廊下にでると隣の研究室の人達も出てきて、ちょっと大きいですね、などと言ってまた仕事に戻ったのを記憶しています。その後関東、東北方面の震度が大きく、停電になったニュースが流れてきましたが、まさか大津波が三陸沿岸の町を押し流し、福島原発を破壊していることなど夢にも思いませんでした。その日の夜は恒例の歯学部部の謝恩会でした。その席で、塩竈出身の卒業生から家が流された、町全体が破壊されたなど大変な話が沢山出てきました。帰宅後テレビをみて、予想を超える悲惨な事態になってしまったことを知ったのです。私の人生で最も甚大な災害です。その後時間がたつにつれ、災害に遭われた方々の大変さに心を痛め、我慢強さ、国民の誠実さなど、あらためて日本の国民性もみることができました。これに対し、政治家の対応の不誠実さは残念です。被災者の方々の早い復興を願う次第です。

この度の震災とは比ぶべくもありませんが、人生には自分に関係なく重大な事柄に対峙させられることがあります。私は今から45年近く前に大学生活を過ごし、当時激しかった大学紛争が自分の人生の中で大きな意味を持つ出来事だったように思われます。学長や学部長も大学立法に反対してデモをする時代でした。一般の学生もデモや大学封鎖・授業ボイコットなどにより、講義をまともにやっている状況ではありませんでした。それも一週間、一ヶ月で終わるようなことではなく、一年さらには数年かかるかもしれないような問題であり、一体大学はどのような道を進んでいくのだろうか、自分はどのような人生を歩めばよいのだろうか、と真剣に考えたものです。この時の、思想・意見を異にする人達との議論は、私の人生観を形成したといっても過言ではありません。人生とは、生きるとは、大学とは、諸々のそれまで漫然と考えていたものを反芻しながら自分で答を出さなければなりません。私が研究者になりたいと思ったのも、この時代でした。研究者であれば、志を高く、孤独に堪え、人に依存することなく、自分の研究分野で何かを残すことができるのではないかと考えて、その後の人生をマイペースで自分を信じて体力の限り研究に没頭してきました。別の人生を歩むことはできないので、これが最善かはわかりませんが、私自身としては最高の研究生活をさせていただいたと思っています。

45年近くの研究生活での私の研究を中心に、専門外の話も紹介しながら私なりに感じたことをまとめて“生理学からみたヒト”を次号の北海道医療大学歯学雑誌の総説に寄稿したいと思って現在執筆中です。これには地球誕生から生物誕生や人類出現までの経過などについても記載していますが、人類誕生はごくごく最近のことです。例えば1億年を1mで換算すると地球の誕生が46m（46億年前）、類人猿出現が5cm（500年前）、現代人（クロマニヨン）の出現が1mm（10万年前）です。この10万年の間にも大地震などの多くの災害を幾度も経て我々の祖先は生き抜いてきました。かなり長い間、自然は我々人類の手に負えるものではありませんでした。近年の急速な科学技術の進歩により、地球のみでなく宇宙のこと、ヒトの身体や病気のことなどが、かなり理解されるようになってきました。それもここ100年にすぎません。反面、科学技術の進歩により、この100年で地球の資源を食いつぶし、環境を汚染するようになってしまいました。これからの人類は、智慧を結集し、自然と共存し、地球を守っていかなければなりません。

私の好きな言葉に“廉恥心”と“懶惰心”があります。いわゆるサラリーマンでなかった私がモットーとしてきた言葉です。この2つがなければ研究者として長くは続かなかった気がします。他人に迷惑をかけず、己に厳しくかつ己に余裕をもつ。これからも、この2つの心を大事にしていきたいと思っています。左記の写真は帯広の六花の森にある“考える人（ロダンから）”です。この彫刻のようにのんびりと心安らかな生活ができるように心がけたいものです。



医療大歯学会雑誌の総説論文を会田先生（再建学系咬合再建補綴学分野）、新岡先生（薬学部人間基礎科学講座）にお願いし寄稿していただきました。Polan先生（う蝕制御治療学分野）にはバングラディッシュの歯科事情を英文で寄稿していただきました。その他にも原著論文が3編、トピックスが10編と充実した紙面となりました。御協力いただいた諸先生に御礼申し上げます。

平成23年6月30日
編集長 和泉 博之

次号（第30巻、第2号）の発行は平成23年12月31日です。

会員各位の投稿原稿募集の締め切りは平成23年9月30日必着と致します。期日厳守の上、ご投稿をお願いします。本誌投稿規定（2011年第30巻、第1号の巻末あるいは歯学部生理学教室のホームページ；<http://www.hoku-iryō-u.ac.jp/~physiol/>）をご参照の上、投稿してください。